

基調講演

ロータリーから学ぶ

R.I.第2770地区バスターガバナー
田中 作次



皆さん、こんにちは。お疲れのところ大変恐縮ですがお話をさせていただきたいと思えます。時間は3時50分までですね。そのように調整して、ちょうど終わられるように調整したいと思っております。

R.I.会長代理として、ジョン・キャリックさまご夫妻のご出席の元に、本日このように歴史と伝統のある国際ロータリー第2710地区の地区大会でお話をさせていただく機会を得ましたこと、本当に喜んでおります。土肥ガバナーをはじめ皆さまに心より厚くお礼申し上げます。

今から6年半前、私がガバナーノミニーとしてアナハイムの国際協議会に出席した当時、R.I.理事としてご活躍されていた松本卓臣さまご夫妻には何かと大変お世話になり、この場を借りて厚くお礼を申し上げます。また私が、ロータリー財団地域コーディネーターだった2年間におきまして、そして、R.I.夢の委員会の委員といたしまして貴地区内、各クラブにおきましては、ロータリーの夢の提案要請など、あるいはロータリー財団へのご寄付につきまして、いつもご無理なお願ひばかり申し上げましたにもかかわらず、多大のご協力を賜り、本当にお礼申し上げます。

本日のテーマは「ロータリーから学ぶ」であります。私は25年前にロータリーに入会させていただいて現在まで国内外を含めて多くの友人ができ、ロータリアンの方々から数々のご指導をうけ、常に新しい挑戦の機会に恵まれました。自分の人生が大きく変わったと思っております。今回は、ロータリーの魅力、ロータリー観

そしてロータリーから学んだことを中心に、私の生き方の変化や体験、そして教えていただいたことの実践について、1時間40分、10分縮めましてお話しさせていただきたいと思えます。

さて、私たちは何のためにこの世に生かされているのか、ということを考えてみることも大切であると思えます。無限に近い宇宙の中の惑星の一つ地球上に、太陽や自然環境の恩恵を受けながら、しかも経済力ある住みやすい国、日本に生まれてきました。何と素晴らしい、幸せなことでありましょうか。世界中には200ほどの国があると云われますが、一人当たりの所得の格差は非常に大きく、その国の所得は日本の100分の1以下の例はたくさんあります。その上に字が書けない、読めないという人たちは、現在の世界人口60億6千万人の中で9億人もいます。食べるものがないため、そして病気などで亡くなっている5歳以下の子どもたちが、毎日3万5千人もいると言われます。同じ地球号に同乗しているものとして、このように飢餓や病気で苦しんでいたりと、民族問題や宗教問題で内戦状態にあって多くの犠牲者を出したり、家を失っている国々の仲間たちを黙って見ていてよいのでありましょうか。一方、かけがえのない地球環境を守ることに心も注がなければなりません。このような点からも、私たちの住む地域社会、国際社会も含めて、私たち一人ひとりが健康で住みやすい、しかも最低限生きていける状態まで引き上げ、少しずつ豊かな生活ができるように改善していく義務が課せられていると思えます。

人間は一人で生きて行くことは不可能です。私たちはこの世に生を受けて以来今日まで、両親、先祖、友人、学校、地域社会、そして国、世界各国からの資源や商品の調達によって、健康で文化的な生活を享受しています。こんなにありがたいことはありません。しかし、そのような環境で育ち生活していると、いつの間にかそのありがたさを見失ってしまう場合がございます。人はこのように多くの方々のお陰で生きている限り、そのお返しをすることが人間として当然の責務であります。人生の目的は、「他人や社会のためにお役に立つこと」と言われる所以はここにあります。企業の目的も同様です。人も企業も自分の利益のみを求めて行くのではなく、他人の利益や社会の利益との調和を意識しながら、ともに成長・発展していかねばなりません。やっていけないことと、やっていいこととの区別をしっかりとわきまえ、行動に移していく姿勢が求められます。これが道徳や倫理の問題です。「良いと思うことはすぐ実行しよう、悪いと思うことはすぐ止めよう」の行動指針を明確に持ち、実践し続けることが大切です。ロータリーで言う奉仕の理想とは何を意味するものかいろいろな言葉が引用されています。ギリシャ人はこう言います。「汝隣人より受くる時、悪となせることを隣人に受けしむなかれ」。エジプト人はこう言います。「己の欲する善を他人のために求めよ」。ペルシャ人曰く「汝施さんと欲するところを施せ」。孔子曰く「汝の施せざるところを他人に施すなかれ」。最後にヘブライ人曰く「何事にもあれ、汝隣人の施すところ、好まざるところを隣人に施すなかれ」となどがあります。それぞれの共通する所は「他人がしてほしいくはないことはやらないようにしよう。そして、他人や社会がしてほしいと思うことをみんながしよう」というものだと思います。見返りを求める奉仕ではなく、ギブアンドギブの行動です。これは単に金銭や物だけのことや多い少ないの問題ではなく、心の問題です。人はだれでも、いつも相手の立場に立って行動し、国や社会のためにお役に立って喜んでもらいたいと思っております。しかしそういう機会に恵まれなかったり、特に日本人は少し恥ずかしがりやのため

あつてか、人の見ている前ではなかなか良いことだと分かっていても、直ちに一步前に入る行動が足りないのではないのでしょうか。このような意味からも、ロータリーは私たちに奉仕の機会や習慣を与えてくれる世界的な素晴らしい組織といえます。私たちは何かの縁があってロータリーに入会できたわけですから、このチャンスを生かすことが大切だと思います。1905年のロータリー創設以来、ポール・ハリスを除いて新会員はロータリアンの推薦がなければ入会できません。だれかの推薦によって入会した会員が、今度はだれかを推薦し、入会していただくことは当然の役割と申せましょう。良い社会を作るためには人の利を図り、世の中に奉仕する気持ちを多くの人々が持つようになることが大切であります。世の中に役立ちたいとする新しい仲間がこのようにたくさん増えてきたのも、新クラブの設立や会員増強のお陰であって、社会に対する将来へのよい影響は計り知れないものとなります。世界平和は一人ひとりのロータリアンの自覚と、善意の積み重ねによって成し遂げることができ、会員の増強によって、その可能性はますます高くなっていくことが予測されます。このような意味を含めて会員の増強の重要性を理解できると思えます。8月のR.I.理事会は、ロータリーの100周年を迎える2005年度中に会員の目標を150万人に設定することを決定しています。ロータリーの創始者、ポール・ハリスは1947年2月号の『ザ・ロータリアン』誌に、彼が全世界のロータリアンに送った最後の言葉として、次のように述べています。「1905年にはロータリーがこのように大きな運動になることは予想さえしていなかった。早春のころ、あまり大きくなりそうにない若木を植える時、人はいつの日かそれが亭々たる大木に育つだろうと確信できるだろうか。それは雨と太陽、神の摂理のほほ笑みを待たなければならないのではないだろうか。若葉が初めて萌え出でるのを見る時、その時こそ、人は大なる木陰を夢見ることができるだろう」とされております。私は今住んでいる八潮市に東京より引っ越してきてから2年後に初めてロータリーが設立されることになって、商工会の会長から誘われて入会

しました。もちろんロータリーのことについて、十分な知識を持っていたわけではありません。どんなに詳しく説明されても理解できませんでした。ましてやロータリーの専門用語など混ぜて話されますと、ますます分からなくなって参りました。しかし、八潮市で今後仕事を続けて行くためには、商工会、いや多くの人たちにお世話にならなければなりません。そこでよく分からないままに入会を決断することになりました。今振り返ってみますと、ロータリークラブに入会するというこの決断も何かのご縁であって、私の生き方・人生観を変える大きなできごととなりました。

ロータリークラブに入会して最初のころは色々な委員会に所属しましたが、ロータリーを理解するために特別努力しようとはその当時考えていませんでした。出席はいつも100%でしたが、ある時ロータリーを退会したい思うようになりしました。それはロータリーのマイナス面が気になったころです。ロータリーはすべて良いところだけあって、欠点は一つもないと思っていただけでもありません。また、正義感だけで世の中が通ると思っていただけでもありませんが、自分の気持ちが納得できない状況になっていき、一人で悩むことになりました。そこで、先輩会員の一人に相談しました。その方は私の悩みを理解してくれました。自分も同じことを何回も体験していると言うのです。「神様でない限り、自分を含めて人間や組織は、みなさん長所を持っていると同時に、欠点も持っている」と言われました。「その時の状況や大きさにもよるが、欠点だけを捕らえてそれを問題にしていたのでは人間関係はできないし、両者にとって不幸なことだ。ロータリーの仲間たちと語り合い、学ぶための道場は、他人の長所を発見しそれを強化し、その上にさらに自分を磨いていくところだ」と言いました。「他人のプラス面に焦点を当てることに徹し、マイナス面は見逃すようにするほうがいいよ」と教えてくれました。私は他人を許す寛容の精神そして忍耐は、人生にとって大変重要であることを知らせられました。先輩ロータリアンからの指導によって、もちろん退会をしないですみました。ポール・ハリス

は、寛容について「ロータリーへの私の道」でこのように述べています。「友情はロータリーを築く岩のように強固な土台であり、寛容の精神はロータリアンを結びつけるものです。もしこの寛容の精神がなければ、各ロータリークラブのあふれんばかりの分子エネルギーでロータリークラブは粉々になってしまうでしょう。寛容という一般性の高い精神が、努力の末得られる唯一不変の成果であると証明されるとしたら、それだけでもロータリーの存在意義があるでしょう」と言われました。このようにして私がロータリーを退会せずにすんだのは先輩ロータリアンのお陰であって、今も感謝しています。外国では退会者の再入会もあるのかもしれませんが、日本では1回ロータリーを退会した人がもう一度再入会することは本来可能なことでありながら実際にはあまり多くありません。何かのちょっとしたことで不満を持ち、退会したいと思う時、辞めたいと思っただけでも辞められるわけですから、簡単に辞めないほうが絶対にいいと私は思います。時々退会した人に「そろそろもう一度入会しませんか」と私が聞きますと、「入ってもいいのだが何となく入りにくい」と言われます。多くの会員が何回か退会したいと思ったことがあるのではないかと思います。その時々、仲間からの忠告やあるいは自らの意志によって思い止まり、現在ではそれが正しい判断であったと思っただけに違いありません。

私は36歳でロータリーに入会したことは先程もお話しさせていただきました。そして41歳で会長を経験いたしました。それまでにクラブの副幹事は経験しましたが、幹事をやったことはありませんでした。ある人が会長になることが決まっていたのに都合でできなくなったために、ピンチヒッターとして急遽代わったのです。その後、ガバナーになる時にも私は本望ではありませんでした。私の人生はピンチヒッターの連続ですが、その都度とても有意義な価値ある奉仕をさせていただいたことに感謝でいっぱいでございます。色いろなロータリーの会議に出席する機会に恵まれ、そこで学んだことを自分の職業に少しずつ取り入れて行くようにしました。お陰で、ロータリーのガバナーをやっている時

に店頭公開できたのも、ロータリーのお陰だと思っております。

ロータリーでは、NOという言葉はないと言われていています。これは、何を頼まれてもハイと素直に引き受け、やってみることが大切だということです。やってもみないでできないと言うことは、もったいない話だと思います。やった経験がなければおさらのこと、挑戦してみることではないでしょうか。やらない理由を探すのではなく、やれる方法を考えることのほうが重要です。お客さまから無理な要求を受けた時でも、その場では断らず、可能性を信じ、どうしたらできるかを真剣に探して行きますと、意外と道が開かれてくることが多いはず。今までの環境や手段では不可能だったものが、その背景を変えてやることで可能となるケースが時々あります。それまでの先入観が阻害要因となって、新しい発想に転換できなくなったり、できることまでをできないと錯覚することが多いようです。「窮すれば通ず」という言葉がありますように、本当に切羽詰まったり、やらなくてはならない状況に追い込まれると、ほとんどのことができるようになっていってしまうとも言っても過言ではないと思います。人間の脳細胞は140億個もあると言われていますが、その内のほんの数パーセントしか使われていないそうです。私たちは生まれながらにして能力の差はそれほどあるわけではないと思いますが、人の生き方によって大きく差が出てきます。この使われていない脳細胞は、必要がないから使われていないのではないかと思います。だれもが持っている価値ある財産としての脳細胞の使用率を高めるためには、将来の夢や高目標をおいて挑戦的な数値目標をたてることも、その一つだと思います。そして、強い信念によって達成しようとする意志と行動力によって常に問題意識が高まり、過去に使ったことのない新しい脳細胞を使うチャンスが生まれて参ります。困難な問題にも進んで対応しようとする心構えや、ロータリーのどんな役職でも要請されたら必ず引き受けるという習慣などが、自分の能力を引き上げるより効果的な方法ではないでしょうか。そして現在与えられている天職をまっとうすることです。

先程も出て参りました、職業のことをVocationと言いますが、その意味は天職です。天から与えられた自分の職業に感謝しながら、自分の役割をまっとうしなければなりません。どのような単純な仕事でも、退屈な仕事でも、心構えとやり方によっては、楽しくもなり、苦しくもあります。どうせしなければならない仕事であれば、楽しくやる方がいいに決まっています。そのためには仕事の目的をしっかりと理解し、同じ仕事なら他の人に負けない実績を作るような、創意工夫と改善策にそった日々の活動がやり甲斐のある仕事につながっていくのだと思います。このように自分に与えられた役割をまっとうすることと同時に、職業方針における職業倫理や道徳も大切です。ただ利益をあげれば良いというものではないでしょう。

私が体験した石油パニックの体験についてお話ししたいと思います。高度経済成長がかなり過熱化の様相を呈して来た1973年10月に石油パニックが起きました。10月6日に第6次中東戦争が始まり、OPECを構成するアラブ諸国が戦争を有利に展開するために石油の生産削減と供給制限を決定、原油価格が大幅に高騰しました。このため石油を直接・間接に使用する関連商品のセメント、紙、洗剤、砂糖などが買い占められ、売り惜しみで狂乱物価となったことは記憶に新しいと思います。市中のスーパーマーケットには洗剤、砂糖などの買いだめ客が殺到し、店には早朝から客の長い行列ができる騒ぎが続きました。インフレ進行の中で、安いうちにたくさん買い貯めておこうという消費者の心理が物不足を深刻にし、それがまた買い貯めを促すという悪循環を招きました。それに便乗した値上げ・売り惜しみが拍車をかけました。当社の場合、大阪で消費者が目の色を変えてトイレットペーパーを買い始めたという情報を耳にしてからわずか数時間後、事態を察知したお客さまから、次第に大量の注文の電話がきました。今までに業界では当然経験したことのないこの異常事態、どのように対処すべきかを考えました。先に申し上げておくべきでしたが、私は2年半前に合併するまでは家庭紙の卸をやっておりました。ですからこの時は紙だけを扱

っており、その恩恵は十分受けられました。お客さまの要望に十分応えていたら、いくら消費があっても足りません。価格はどんなに高くてもいいから、数量が欲しいという注文が殺到したわけです。しかし私たちは冷静に判断することにし、自分が消費者だったらどうするか、また小売店だったらどうするかを考え、パニックが終わった後のほうが重要であり、当社の信用を築く最高の機会だと思いました。そこで当社をとった対策は、まず公平の配分を原則とし、過去1年間のお客さまごとの実績を元に、既存権利を尊重した配分書を作成、お客さまにご了解を頂きました。2番目はお客さまが困っている時に価格を高くしてはいけなくして、セールスマン全員に今までと同じ料金層を上回る価格で販売しないように、卸の上限価格を守るように指示しました。毎日入荷してもその日のうちに倉庫は空っぽになるという環境で、どんなに高くしても売れるという状況がありました。しかしそれをやってはいけません。3番目は新規の取引をしないことでした。このような混乱の中で意志決定で大切なことは、常に相手の立場になる、相手の弱みにつけこまない、自分良心に照らして忠実か後になって振り返った時に正しかったと言えるような行動、目先よりも将来の信用だと思えます。このパニックでも、決断と行動によってその後の不況も乗り越えられたことを喜んでいきます。

マイナスがプラスを生む例は他にもたくさんあります。生前、松下幸之介氏は「お金が無かったからお金を作ろうとした。学歴が無かったから他人の話を謙虚によく聞いて実行した。体が弱かったから事業路線を考えた」と語っています。自分にとってマイナスの環境下にある場合、ある人にとっては運が悪かった、ある人は仕方ないと、最初からあきらめて努力もせず、自然の成り行きにまかせていきます。ある人は反対にそのハンデをバネに、立ち上がろうとします。人生において自分ではどうしようもないこともあります。生きること、老いていくこと、病気になること、そして死んで行くことの4つの苦しみの中での生きていく間が最も長く、その間には楽しいことも苦しいことも両者が存在

しています。しかし自分の人生目標や夢の実現に向かって行動している時の苦しみは、それほど苦痛と感じられないのが常であります。スポーツ選手が他人から見て苦しい、ハードと思われる訓練を毎日行っていけるのは、明確な目標を持っているからです。未来に向かって明るい希望と目標を持ち、困難な問題にも勇敢に立ち向かって行きたいものだと思っております。デリバリーニュースから、私の好きな言葉を紹介します。「人がその輝きを増す時、夜が暗ければ暗いほど星もその輝きを増し加え、日が暑ければ暑いほど金もその純度を増し加えられる。人格はちょうど香しいバラのように、押し潰される時その芳香を一番よく放つ。事態が困難を極める時には、こすられて初めてつやが出ることを思い出すことである。全然トラブルなしに走りとおせる車はないと同様に、人も何事もないまま成功への道を走り抜くことはできない。災いが私たちから取り除かれることよりも、私たちがそれによって益を受けることの報にもっと目を向けるべきだ。試練によって私たちは弱くなるのではない。ただどれだけ弱いかを知るだけだ。逆境とは、その宝石を磨く際に用いる研磨用の粉末ダイヤモンドである」このように言っております。

私たちはどのような場面においてもプラス思考で行動することが大切です。もしかしたら試験に落ちるかもしれないと思って、最初からあきらめる人と、もしかしたら受かるかもしれないとって積極的に挑戦する人がいます。成功者はほとんどが後者のタイプだと思えます。人間は消極的であっては人生の損失です。物事を良いほうに、良いほうにと考えていきたいものです。先輩から叱られる時も、何の理由もなく叱られてしまうはずがありません。自分の将来のために、必要なことを教えてくれようとしています。ここで腹を立てたのでは損をします。まったく見込みのない人だったら、嫌なことを言っても無駄ですから何も言わないでしょう。親が子どもを叱るのも同様です。自分を高めていこうとするならば、素直にありがとうと感謝しなければならぬはずで、また他人の悪口を言うのはマイナス思考。他人をほめることは

プラス思考です。人間は勝手なもので、たまに雨が降るといやな顔をしたりグチを言いたがります。しかし一方で、毎日貴重な水を無意識の内に大量に消費しています。山の樹木は久しぶりの雨で互いに喜びあっています。生き生きとしています。1年間で一定の雨は必ず降ってくるのです。これを喜んで歓迎しなければなりません。朝と夜、北と南、権利と義務など、どれを取っていても一方だけでは成り立ちません。何もしないで毎日ビールを飲んでいても、けっしておいしく飲めるものではありません。一生懸命に仕事をした後だからこそ、おいしいと言えるのでしょうか。仕事をせずに毎日ゴルフをしていても、どうでしょうか。忙しい仕事の合間をぬってのゴルフだからこそ意味があるのだと思います。一生は1回しかありません。納得のいく人生を送るためには、それなりの考え方と行動をしなければなりません。

神戸で震災に遭われた方のお話しによれば、「今までは近所との関係もそれほどなく、他人へ迷惑がかからない生き方ができると思っていたが、とんでもない間違いであることが分かった。震災後色々な助け合いが行われました。一人では生きていけない。大勢の方々のお陰で今まで生きて来られたことがやっと分かった。感謝でいっぱいです」と言われました。まずすべてに感謝をし、社会のためにお役に立てることに喜びを感じ、世の中が少しでも良くなっていくよう協力できれば最高の生き方だと思えます。

ロータリー入会以来、ロータリーの友人からたくさんの友情と手助けをいただきましたが、私の体験した例を二つだけお話ししたいと思います。ロータリーに入ってしばらくした時、3年後くらいですね。私の会社で東京の浜長にある明治座を借り切って、お客さまの招待会を実施しました。招待客の2000名のお客さまの中から15名さまを2ヵ月後にグアム島に招待するという抽選付きです。そして参加してくださる方は、どちらかと言えば年配のご婦人の方が全体の60%以上で、あとは若い男性の方でした。4泊5日の短い旅とはいえ、お客さまに喜んでいただくために引率者として同行した私は、若い人たちとは夜遅くまで付き合いました。2時、

3時まで。年配の皆さんとは朝早くからお付き合いすることになりました。4時ごろからです。寝る時間は2時間くらいですね。疲れのためか、帰国後、翌日の早朝、胸がギュッと締め付けられるようになり、呼吸ができなくなりました。この時、すぐロータリーの会員である小林ドクターに家内から電話をしてもらい、車で送ってもらいました。痛み止めを打っても、効果は全くありません。モルヒネを打ってもらいました。しばらく休んでから入院設備のある広瀬病院と連絡を取って、そこに移動しました。広瀬先生は同じクラブの創設会員です。そこで2週間入院の間、毎日、小林先生が仕事を終えてから広瀬病院まで私のことを心配し、見舞いに来てくれるではありませんか。同じロータリーの仲間とはいえ、このように思いやりの心を行動で実践する小林先生の心遣いには、頭の下がる思いがいたしました。2週間でも私の病気の原因はよく分からず、東京女子医大で精密検査を受けることになりました。3週間ほどで原因が分かり、心外膜炎と診断されました。心臓の回りにウイルスが付着し、心筋梗塞のような症状になったと言われました。このように3つの病院でお世話になるにつけても、それぞれロータリー会員のお世話で私の命が助かったと思う時、ロータリーという組織、そして会員の素晴らしさに感動するだけではなく、今後何かでお返しをしなければと思いました。私は退院後自分の健康管理のために小林先生から教えていただいた4つのことを必ず守ると会社の社員に宣言しました。一つ目は、それまで1日40本吸っていたタバコを止めることにしました。二つ目は1日3食をキチンと食べることでした。当たり前のことなんですけれども。三つ目は夜11時までには床につくことです。最後は1日平均7時間の睡眠を取ることでした。今でもそれは守っています。

次はもう一つの体験です。今から13年前の11月5日、私はロサンゼルスにいました。ロサンゼルス朝、今から出掛けようという時、日本から電話が入りました。日本時間では夜の10時半でした。私の娘からの電話です。当社は本社と八潮支店が一緒になっていたのですが、

それが火災で燃えているのですぐ帰ってくるようにと電話あったんです。しかしこれは多分、夢ではないかと疑い、自分の手をつねってみましたがやはり痛く感じました。それでも信じられず、1回電話を切ってもう一度こちらからかけると言って切りました。でもやはり変わりませんでした。火災は事実でした。すでに燃えているのだから仕方がありません。死傷者が出ないことと、外部に火が移らないことを祈るのみでした。八潮市の歴史上、初めての火災に近隣の市からもたくさんの消防車の応援があり、翌日も燃え続けました。紙の卸問屋ですから燃えやすいはずです。その割には燃え尽きるまでに時間がかかったようです。

ロスから会社に対して私が出した指示は32項目に渡りました。翌日関東に発送するための商品も、あるいはコンピューターも注文を受けた伝票も全部燃えて無くなっています。しかしその上で次のことを指示しました。商品は翌日約束どおり、お客さまに必ず届けること。お客さまから後になってさらに信用を得るための方策を考えなさい。同じような災難に遭った時、他社ではできないようなお客さまへの期待を超えた満足を提供しなさい。困ることはロータリーの会長に相談して、当社の関東の全支店を活用し、全社一丸となって対応するようということです。ロータリーの講演で危機管理のことを聞いていたので、大変参考になりました。大きな量販小売業はすべて仕入れ伝票を直接私たちのコンピューターに入力し、その出力伝票に基づいて配達をしています。しかし、当日アウトプットされたお客さまの仕入れ伝票も火災で燃えてありません。そこで真夜中に量販小売業のバイヤーの自宅に電話を入れ、状況をお話しした上で、コンピューターの接続を当社のほかの支店に切り替え、仕切り伝票を再発行してくれるよう依頼したわけです。商品は他の10の支店から分けてもらいました。量販店以外のお客さまからの受注伝票も燃えてありませんので、すべてのお客さまに電話で確認しなければなりません。電話も30、40本必要になりましたが、ロータリーの会員のN T Tの支店長さまに依頼し、すぐに調達できました。仮事務所は近くの公民

館をロータリーの会員である小森さんに依頼して使わせていただき、ほかの会社や団体の予約を急に変更してもらいました。このように火災で近隣に多大の迷惑をかけながら、ロータリー会員の皆さまのご協力で、ほとんど品切れをせずにお客さまのお役に立つことができました。本当にありがたいことだと思います。

それでは少しこの辺で内容を変え、1991年に1000部の限定版でR. I.から発行された、『ロータリーウイズダム』の中の『私がロータリアンになっている理由』の中から5人の国際ロータリー会長を務められた方、これから務められる方の寄稿文を紹介したいと思います。5人の方々はロータリーにどんなきっかけでどのように入会し、それぞれの人生をどう変えてきたか、そしてその価値をどのように評価するかについて、興味深い内容であると思います。

まず最初に1968-69年度、日本で最初にR. I.会長になった東ヶ崎潔さんの寄稿文を紹介します。

「ロータリーについて最も重要なことは、私に関する限り、会員一人ひとり、全部に参加の機会を提供していることです。午前中のミーティングにもありました『参加が大事です』ということですね。私がロータリアンになっているのは、参加を機会と見るだけではなく、厳正な責任、いや実に高貴なる挑戦と見るからです。参加せよ、これは私が20年以上前、今から考えると30年前ですが、国際ロータリーの会長をしていた時の私のテーマでした。しかも、それは今でも仲間のロータリアンたちに贈ることのできる、最も緊要なメッセージです。ロータリアンたるもの後部座席の指図がましい乗客や外野席コーチや地上将軍の地位に満足してはなりません。重荷そして責任を分かち合いながら、その成果の誇りも分かち合うものです。私は、非ロータリアンの人たちからロータリーって何ですかと度々尋ねられました。私はこの人たちには「ロータリーは広汎で多様なプロセスです」と語ります。「それは生きているプロセスであり、制度ではありません。家族と家庭に対する生得の関心に取り組む機会、地域社会の、外部からの関心に取り組む機会です。第1にそれはロー

タリー社会への関心であり、親睦の必要の継続を図ります。次にそれは職業と一般市民の社会への関心です。そしてまた、それは国民と世界の地域社会への関心です。最後にそれは、拡大し続ける地平線、世界へ参加することです。ロータリーは多くのことを意味します。従って、全ロータリアンに共通した一つの意味を持つ3つの言葉、この簡単な言葉があります。すなわち、「Service Above Self」越我の奉仕であります。私たちロータリアンが基準としている理想というものの実現のためには、世界的な努力をする上で傍観者になっているのでは十分ではありません。ほかの人々は困難な問題の解決に取り組んでいるのに、見物人になっているのでは十分ではありません。解決すべき問題がいくつも存在します。私たちはそういう問題の解決を求めて山頂に登り、そして限りなき広がりを見守ることができるのです」と語られました。

次の寄稿文は、日本から国際ロータリー会長になられた2名のうちの1名、「人類は一つ、世界中に友情の輪をかけよう」というテーマをかがげられた、1982年-83年度R. I.会長の向笠広次さんです。

「私の友人で眼科医をしている人が、私をロータリーに誘ってくれました。しかし私はこれを辞退したのでした。私の言い分は、『私は多忙な医者なので、毎週決まった時間に昼食会に出席するのはとても不可能だ』というものです。これはもちろん私の誤りでした。彼の幾度にも渡る説得のお陰で、ついに私はロータリアンになりました。今は彼に大変感謝しています。なぜかと言いますと、もしもロータリアンにならなかったとしたならば、世界中に多くの良い友人を得て、ロータリアンであるこの喜びを知ることができなかったでしょう。私の年度の会長としての標語は『人類は一つである。世界中に友情の橋を懸けよう』というものでした。第2次世界大戦直前に、全世界にわたり精神医学的調査が行われましたが、それによると精神病の遺伝的形質継承の割合は、各国ともほとんど同じであることが分かりました。私はこの調査に参加して、日本もその例外でないことを発見しました。これは、人間は世界中どこでも、その考

え方と感じ方が全く同じだということの意味するものです。それには、国民や皮膚の色や言語や宗教などは何の関係もないということです。自分の孫たちが先祖の人数を知りたがった時、次のように答えたものでした。今から10代逆上ると、1000人の祖父母がいます。20代では100万人の祖先を持ち30代では10億人の祖先を持ちます。同じような計算が、私たちの子孫にも当てはまります。私たちの全部が2人の子供を持っているとすれば、私たち一人ひとりが10世代後には1000人の孫、ひ孫、20世代後には100万、そして30世代後には10億の孫、ひ孫を持つことになり、人類は1つの大家族なのです。私は、高等学校時代以来、国際的なことになじんで来ました。今や私は世界の多くの国々にこのように多数の友人を得て本当に幸せであると思っています。そして私を無理やりロータリアンにしてくれた友人に改めて感謝しているところです。ほとんどの方の話はですね、最初誘われた時はあまり入りたくなかった、でも後で考えたら全部感謝感謝になりますね。ですから私たちは新たな会員をいっぱい推薦し、誘わなくてはならないという責務を感じるとるんではないかと思っています」。

3人目は、本年度R. I.会長のフランク・デブリンさんの寄稿です。

「私がロータリーに入会の誘いを受けてから20年が経ちました。書いた時から見ますと30年でしょう。私はなぜあの会合に出かけていったのか、なぜロータリアンになることを了承したのかなど思い出すことは難しいのですが、ロータリーに入会したことは私の人生の大切な転機になりました。振り返ってみますと、私の転機だったに違いありません。なぜならば私はその時、ロータリーはどんな他の団体とも違うことを認識したからです。私の地域のロータリアンはこの地域社会での優れた指導者であることを私は知っていました。この誉高き団体への加入を推薦されることは大学の誉れ高き友愛会に推薦されるのに似ています。ロータリーについて多くを知るようになるにつれ、私はそれだけますますその理想やプログラムについて感銘を深め、

関与を深め、これを支持するようになりました。私はロータリーについての多くのことを観察しましたが、到達した結論は、ロータリアンとは人々が必要とする人々であるということでした。数年前に流行した歌がありました。その歌詞は、人々を求め人々こそこの世の中で最も幸せな人だということでした。ロータリアンたちはみんな一緒にやれば、たった1人でやるよりは地域社会の援助がより多くできるものだと言うことを知っており、その間私たちはそういう協力を実践しています。私は例会プログラムを通して、私の地域で行われているほかの色んな活動のことを知るようになりましたが、それ以前はそういうことについてほとんど漠然としか知りませんでした。ロータリーは私の国際性を教えてくれました。私は全世界のロータリアンたちと接することができます。それは私のクラブで、地区大会で、そして国際大会で実に私と私の家族にとっての生き方となっています。ロータリーは私たちのこの世界を援助するたくさん色んな可能性と機会を提供しているのだということを知りました。

最後はちょっと省きまして、4人目は来年度国際ロータリー会長になりますリチャード・キングさん。この方は今度ロータリー研究会にも参ります。京都ロータリー75周年にもいらっしやいます。

「私はロータリアンです。私がロータリアンになっているのは信仰があるからです。私たちがロータリーで行っていることは、神の欲したもう御技です。ロータリーは足の障害者を歩ませ、目の見えない人を見えるようにし、耳の不自由な人を聞こえるようにします。また飢えている人に食べ物を与え、着るものを持たない裸の人たちに衣服を着せ、病める人を癒します。ロータリーは希望をもたらすものです。私がロータリアンになっているのは必要であるからです。私にはロータリーが必要なのです。つまり私が、目が不自由な婦人が見えるようになるのを見たり、ポリオで体の不自由な少年が肘ではってきて私の前で止まったり、ロータリーの大会のスピーチコンテストで賞を取ったばかりの少年の顔を見たりした時に沸いてくる、あの感情です。

私がロータリアンになっている理由は、愛があるからです。世界中の友達、肌の色、人種、宗教、文化、政治がさまざまに異なってもみんなが神の子である、友達の愛です。R.I.会長のパウロ・コスタ氏がある時、自分の趣味のことを聞かれ、こう答えました。「切手を集める人々もいる。コインを集める人々もいますが、私は友達を集めています。私たちは彼と同じ趣味を共有しています。ロータリーがあるからです。それから私がロータリーになっている理由に、『約束』があります。その約束は何年も前に、大インド砂漠である夜ある老人にした約束です。彼は94歳のヒンズー教徒で、半世紀の間ロータリアンになっていた人です」。

あと省略しますが、この人のことをいつも思い、この感動を忘れることはできないと語っています。

この5人の方の最後が次々年度、来年のキングさんの次のR.I.会長に決まりました、11年ぶりにアジアから選ばれた、タイのリーチャイ・ラタクルさんの寄稿文です。

「私はロータリーには何ら信仰心を持っていないかったので、ロータリアンをからかうのを常としていました。私は、ロータリーが本当に奉仕のクラブだと思ったことはなく、単なる昼食のクラブだと思っていました。私はロータリアンたち、殊に私が専務取締役として働いていた製薬工場でたまたま内科医をしていたロータリアンをからかうのが趣味でした。そのころ、私は彼が毎週正午になると彼のクラブの昼食会に出席しているということだけで、なぜあんなにイソイソと興奮してくるのが理解できませんでした。このロータリアンである医者、患者がタイの地方からきてバンコクまでの交通費を持ち合わせていないのがわかると、(治療費を) 請求しないことが多かったのですが、私にはそれがなぜだか理解できませんでした。患者たちは自分たちの農地から採れたバナナやマンゴーを持ってきて治療代の払いとして当てていました。私は彼が亡くなった後も答えが分かりませんでした。私は全くロータリーには関心がなかったのです。しかし、運悪く私はある老紳士によって、ロータリーに引きずり込まれたのです。こ

の紳士は1958年、私の父に接近して、新しいロータリークラブの結成の手伝いをしてくれるよう懇願しました。このクラブはタイでは2番目のクラブで1958年5月14日に誕生しました。父は私と同様、ロータリーには全く関心がありませんでしたが、その友人への尊敬から、私に無理やりその老紳士の手伝いをさせたのでした。あとで分かったのですが、この紳士は1930年に創設されたバンコクロータリークラブの会員で、今度はこの国2回目のクラブとなるドンブリロータリークラブの創立会長になることに決まっていた。私は彼がジョージ・バーナード・ショーの文章から取った引用句を今でも非常に良く思い出すことができます。『人生は束の間、ロウソクではない。それはすばらしい炬火なのだ。私はそれを将来の1世代へと引き渡す前にできるだけ、明るく、赤々と燃えさせたい』こう言いました。誠に彼は私の人生を完全に変えることになった、すばらしい炬火を私に手渡してくれたのだ。大変利己的な男、自分自身の事しか考えない男、与えることは美德であって、与えないことは恥辱であるという考え方を一度も持ったことのない男、他の人々の思いやりと手助けのない男、そういう男だった私を変えてくれたのです。ロータリアンになったことは、私を責任ある市民に、ロータリアンに、そしてできるだけ多くの喜びを他の人々に与えることを考えて、万事を計画するビジョンと、使命感ある政治家へと変えていきました。かなり前の1958年に、私とロータリー生活を共にした彼はもうこの世にはいません。しかしロータリーは善であり、善を行うという彼のロータリーとの知恵と信念は私が行うことのすべてについての道案内人の炬火となってくれるのでしょう」。

このように、5人の方の寄稿文を読んで共通する点は、自分から進んでロータリーへ入会したのではなく、誰かがロータリーに誘ってくれたという点です。しかし彼らは、最初から入会のための推薦者に感謝していないものの、後になるほど入会の勧誘に対しての感謝の念を持っていることが分かります。この点からも、ロータリーに新しい会員を誘うことの意義や重要性を理解することができます。そして彼らにして

も、最初からロータリーのことをよく知っているはずありません。何となく例会に出席していたのかもしれませんが。ある時、何らかのきっかけで、例えばクラブの委員長や幹事、そして会長などの役職を受けた時、ガバナーの指名を受けた時などから、使命を全うするために、必要を感じて無私にロータリーを理解するようになったことです。そしてロータリーの信仰が、彼らの人生に著しく良い影響を与え、他人や社会のために尽くし、世界平和のために役立っていくことが彼らの幸せにつながって行くことを信じて、この運動を幅広く推進していく使命感を持っているように感じます。ロータリーの例会、行事、奉仕プロジェクトにより多く参加し、少しでも深く入り込むことによってロータリーの特徴や長所を発見することができると思います。私たちはまだまだロータリーの表面しか見えていない場合が多くあります。95年にも及ぶロータリーの歴史や発見の積み重ねは格別の様相を持ち合わせています。ロータリーの概観にも述べていますが、大きなニーズがあって、そのニーズに応えるために人道的運動が誕生します。こうした運動を成功させるためには、明確な使命感と達成方法が必要です。フランスのアルバート・シュバイツァー氏はノーベル平和賞受賞者であり、医者であり、我々と同じロータリアンでもありました。1960年ころ、次のような所感を述べています。「国際ロータリーのようなボランティア運動は、人格の陶冶や人間としての真の育成に不可欠であります。そして大きな政治的連合体のほかに何もこのような団体がないとしたら、私たちの現在おかれている世界情勢において大きな試練を切り抜ける見込みはありません。また私は、友人のアインシュタインと共に人類の将来を憂慮しつつ、生まれて生きて来ました。アインシュタインは私の長年にわたる友人で、偉大なる運動を待ち望んでいたことを私はよく知っています。そして今この運動が、皆さまの連合体であるロータリーやそのほかに結実したのです」とこのように述べています。どうでしょうか。この所感を述べられた時から既に50年の歳月が過ぎておりますが、その後ロータリーの果たす役割は計り知れないほど大

きくなり、世界平和のためにますます必要な存在となっています。

世界のほとんどの人が予想さえできなかったポリオとの戦いの終結も、皆さまの温かいご支援によってロータリー創設100周年に当たる2005年には勝利宣言が約束されるのではないかと考えております。国際ロータリーはWHOをはじめほかの組織や各国政府との提携によって、この大事業を成し遂げようとしています。国際ロータリーのひたむきな信念と行動が、ほかの組織や各国政府を動かしたこの実績は、過去にも未来にも2度とあるとは思えないほどの出来事であったと考えます。国際ロータリーのロータリー財団も人道的、教育的、そして文化交流プログラムを通じて世界理解と友好親善に大きく貢献しています。皆さまのご協力をさらにお願いしなければならぬと思います。

さて時間があと12分半になりました。私がロータリーに入ってから感じていることを、時間の許す限り簡条書きにお話しをして終わりたいと思います。

先程もちょっと出てまいりましたけれども、できない理由を探すことです。何かを問われた時、今までの経験や習ったことの範囲の中から答えようとすれば、それは答えられない。ですからその背景や前提条件を変えることによって、新しい対策が出てくるという事で、できない事を探すのではなく、できる方法を考えよう、これが一つです。

もう一つ、今からでも遅くない、気が付いた時が自分にとって最も早いことだということ。過去より未来。ある事を言われた時、「いやこの年じゃもう遅い」ということはありません。今そう思ったらそこから実行、年は関係ありません。80であろうが90であろうが30であろうが、思ったことは自分でやる、思わなければやらない。それでいいんじゃないかなと私は思います。

すべての人に平等に与えられ、限られた時間の有効な使い方の競争が人生だと。同じ24時間が同じように働いている、その時間は計画的に時間配分しよう。遊ぶ時は1週間遊ぶという計画を作ろう。何をしているか分からなく時間を過ごすことを止めよう。そうすればロータリー

の例会出席は時間の作り次第ですから如何ようにもできる。暇な人はロータリーに出席することはできません。ここにおられる人は忙しい人ばかりだから、このように出席していただけるんだと思います。

困ったことがなければ社会の発展や組織の発展はない。こういう意味でいくと、今ロータリーがおかれている一番の問題は会員の減少です。しかし95年の歴史の中で2度ほど減ったことがありましたが、今回は一番大きい。だが本来、ここまで急に伸びたこと自体に原因があったのかもしれない。今そんなに慌てることなく、本来のロータリーの基本に戻りながら着実に増やしていくことはできると思います。その期間というのはあまり焦らずに、ゆっくりと着実にロータリーの本来の奉仕をしながら伸ばしていくことが大事ではないかと思えます。

堤防が切れたから、堤防がキチンとできたんだ。何かがおかしくなったから政治的にそれは解決できたんだ。なかったらできない。まずいいことはいいこと。私は、失敗や困ったことほどいいことはないのではないかと思えます。

次は自分を助けるのは自分しかないと思えます。ほかを当てにしたり、ほかに依存心を高めることは自分を弱くする。なるべく借りを作らない。しかし私はロータリアンから色々な借りをもらいました。命の借り、火災時の借り、この借りはありがたい。この何十倍何百倍を世界の方たちのために、違う方たちに返すようになるかもしれませんが、返したいと思えます。ロータリー財団にも、お金があったらなかなか寄付できません。私はお金がないから寄付できるんです。借入れ金を起こして寄付しています。

意志あるところに道がある。自分がああしたい、こうしたいと思わない限り、それはあまり達成はしないでしょう。意志を持ち、やりたいと思うことを深く深く思いを寄せること、思うこと、信じること、夢を持つこと、そして何をしたいのか、これを500回人の前で話せば物事はほとんど達成したと同じではないでしょうか。

人生は常に勉強。人の話をよく聞き、学ぶことにある。もう皆さまもよく聞いていることでしょうか、神様は耳2つと口1つを作ってくれ

た。2つ聞いて1つ話す。大事なことだと思えます。

後悔はしないが反省はしよう。終わったことでどんなに考えても仕方ないこと、それを考える時間があつたら未来のことを考えたほうがいい。しかし反省は必要。反省は改善、改革につながります。このように思えます。さっきも言いましたが、感謝は分かっているようですすぐ忘れる。奥さんの大切さは空気のようにすぐ忘れることができる。しかし一番ありがたい人だ。その感謝を行動で表さねばいけない。私は失敗したことがあります。お昼にカレーライスを食べ、家に帰ったらまたカレーライスでした。「あれ、またカレーライス」と一言間違っただけです。そうしたら、毎回食事の度に『誰が作ってるの?』と言われました。それからカレーライスを朝食食べても昼食べても、夜カレーライスが出たら、「ああ、おいしいね」と言うことになりました。

失敗は成功の元、相手がどう喜ぶか悲しむか、これによって自分の行動が変わらなければならぬと思えます。人を変えることはできないけれども、自分を変えることはできます。環境を変えることはできませんが自分を変えることはできます。相手を変えようと思ったら自分を変えない限り相手は変わらないと思えます。目には目をというのがあります。私は目にも愛をという風が変わって来ました。非常にこの人が私にとって冷たく当たった場合、嫌いになるような行動の場合、その人を好きにならなければなりません。良いところ良いところを発見し、その人に対して入っていきます。こちらがあの人を嫌いになったら、その人は私を2倍嫌いになります。私が2倍好きになればその人はもっと多くなるかもしれません。まず自分からどうするか、ロータリーの行動も活動もみなさんやってくださいと言う前に自分がやらない限り人はやってくれません。これは難しい。まず自分がやるということが大切だと思っています。ライバルは自分だということをつくづく思えます。自分が作った計画がそのままできないで、ああだこうだ言っても仕方ありません。高橋さんという女性の方は強かったですね。シドニーのオ

リンピックで優勝しました。自分のペースを保つ、そして苦しい時は周囲の人も同じように苦しいと思う。それが自分に勝ったということではないでしょうか。

ウォルマートという会社、世界で一番大きい小売業の会社がございます。ご存じの通りアメリカの会社です。田舎から出て来た会社ですが急速に伸びました。全部の売上は15兆円。世界で第2位の小売業はフランスのカルフルで、まもなく日本に上陸し、3店舗出します。その2倍半の売上がウォルマートです。そのウォルマートの社員に対する8つの目標を今言います。一つは高い目標を持ち、日々向上心で生きよう。ロータリーと一緒にですね。2番目、負けると絶対思わない。3番目持たざるを嘆くな。4番目、当たり前のことを必死にやろう。ロータリーも基本の徹底が大事です。当たり前が大事です。5つ目は、時には変幻自在でも良い。変化の激しい時代ですから潮流俯瞰も必要でしょう。6つ目、富も喜びも分かち合おう。R.I.会長代理も言われました。シェアすることが大切です。7番目、常に謙虚に。そして常に学ぼう。転換発想をしよう。点を変える、ロケーションですね。最後の8つ目が他人や顧客の期待を上回ろう。お客さまが買いにみえたら、だいたい想像してくることを上回ることをする。駅にどなたかを送っていきます。駅の所から20mくらいの角の所で、「ああ、もうここで降りますから結構です」と言われることもあります。わずか20mのところを送って言った方が相手はもっと期待を上回る満足をするのではないのでしょうか。「ああそうですか」とそこで降りず手はないですね。時間がかかるといっても1分かかりません。これは小さな例ですけど、これも大切なことではないかと思えます。

自分で自分を信じれる自分を作ろう。自分が自分を信じられなくて誰が自分を信じられますか。私は自分の心に免じてこれがいいか悪いかを判断し、まずいことはやめよう、いいことはすぐやろう。この意味でもロータリーの精神は自分で自分を信じる自分を作ろうだと思えます。

大きなことより小さなことに注意しよう。大きなことは避ければ通れます。山登りして大き

な石があれば避けます。しかし小さな木の根っこにぶつかって大怪我をします。小さなことをばかにしない。大きいことは分かりますが、小さいことは見えない。景気の良い時はまずい芽がたくさん出ているにもかかわらず、消えて見えません。悪くなってくるとどんどんそれが見えて来ます。これは大事なことだと思います。逃げる道を作る。自分に対しても逃げ道を作るのは政治家は上手いです。政治家は自分で必ず逃げ道を作って発案を作ります。しかし私たちは相手に対してこれでもかこれでもかという逃げ道を作らないような責め方をした場合、どうなるでしょうか。やはりここは我慢して、もうひと息責めたくても責めない。しかしディスカッションではどんどん思ったことを言う。こういう世界がいいのではないかと思います。あと2分です。

業績が悪かったのは社員のせいじゃない。業績が悪かったのは社長のせい。業績が良かったのは社員のせい。このような発想に切り替えることによって上手く行くのではないかと思います。だいたい、私もそのように思うことは難し



いのではないかと思います。無理にそうするように努力しています。

教わったことを教わったままではだめだ。教わったことを人に教えて初めてものになる。教える、あるいは聞いてもらう。半教半学ということをよく言います。半分教えているようで実は半分自分が教わっているんですよ、このことは大切だと思います。

世の中に自分のものは一つもない、今所有しているものは本来自分のものではないと思えますね。この地球、社会全体のものだと思いますね。それを一時的に自分が預かっているんだと。だから私のものは皆さんのもの、皆さんのものは皆さんのもの、みんながそう言えば全部になりますね。ですから欲張りがあるから、まず欲が重なるから不幸せになるのであって、少し不足な経済の方が私は幸せに行けると思う。今の子供たちもそうです。最後に、私たちのロータリーの考え方は、他人への関心度をより増しながら、そして社会や人々のために、自分のできる範囲でやって行くことではないかと思います。今日はありがとうございました。

略歴

田中作次 TANAKA SAKUJI

1939年生まれ

1966年 株式会社タナカ設立 代表取締役社長

1998年 ダイカ株式会社 代表取締役会長

業界役職

1991年 東京和紙会 会長

1996年 東京紙商家庭紙同業会 理事長

1996年 全国家庭紙同業会連合会 理事長

1998年 八潮市商工会 副会長

ロータリー歴

1975年 八潮ロータリー・クラブ 創立会員 (36才)

1980年 八潮ロータリー・クラブ 会長

1988年 第2770地区 分区代理

1994年 R.I.第2770地区 ガバナー

1995年 ロータリーの友 顧問

1996~98年 ロータリー財団 地域コーディネーター

1996年 R.I.第2790地区地区大会 R.I.会長代理

1996~99年 ロータリー米山記念奨学会広報委員会 委員

1997年 R.I.1997年国際協議会 トレーニング・リーダー

1997年 R.I.ゾーントレーニング・リーダー (ゾーン1~4A)

1997~01年 R.I.ロータリー財団恒久基金日本研究グループメンバー

1998年 R.I.貧困飢餓救済グループ第2ゾーンコーディネーター

1998年 R.I.ロータリーの夢委員会 委員

1999年 R.I.第2740地区地区大会 R.I.会長代理

1999~01年 R.I.指導力養成・研修委員会 委員

2000年 R.I.他団体との提携グループ委員会 委員 (ゾーン2)

パネリスト

1996年 バンコックアジア大会、1998年インディアナポリス国際大会

1995~99年 ロータリー研究会 (神戸、札幌、名古屋その他)

モデレーター

1999年 アナハイム国際研究会、R.I.会長主催京都アジア会議

1999年 シンガポール国際大会、京都ロータリー研究会

その他

2000・6・6 ブエノスアイレス国際大会場にてshort speech

財団基金設立

ロータリー財団冠名奨学金基金設立 (2回)

ロータリー財団冠名基金設立 (2回)

賞

ホールハリス・フェロー (15回)、米山功労者 (15回)

ベネファクター27口、超私の奉仕賞、ロータリー財団功労賞

ロータリー財団遺贈友の会会員